

「ST養成校の音響学教師のつながり」を作る*

○竹内京子（順天堂大）、青木直史（北大）、荒井隆行（上智大）、△鈴木恵子（北里大）、
世木秀明（千葉工大）、△秦若菜（北里大）、安啓一（筑波技術大）

1 はじめに

ことばのリハビリを行う言語聴覚士（S T）の養成校では、音響学が必修科目であるが、学生にとって最も苦手な科目である。[1]音響学の授業の改善には、教材や教授法を工夫し、分かりやすく伝えるということ。さらに、将来の臨床で必要であるということを学生に示すことも必要である。しかしながら、問題となるのは、音響学教師はS Tの臨床を知る機会がないこと、授業改善にあたり、他の音響学教師との交流や、授業見学などの機会がないことである。本発表は、養成校の音響学教師間のつながり、さらには現役STとのつながりを作る活動を紹介する。

2 音響学教師間のつながり

2.1 なぜ必要か？

「つながり」がなぜ必要かについては、以下の3つの理由がある。

- 1) S T 養成校の音響学は他の科目と比べても苦手な学生が多く、教材、教授法など、改善すべきことが沢山ある。
- 2) 「言語聴覚士のための音響学」は、臨床の業務に特化した音響学である。また、そのカリキュラム、教材内容を理解するためには臨床現場の知識が必要であるが、音響学教師の大部分はほとんど知識がない。さらに、それを教えてくれる者や機会がない。
- 3) 決められたカリキュラム内容を教え、その後大学受験や国家試験など、理解度確認の機会がある授業には、何をどのように教えるかを学ぶ教師間の研究会があるのが普通である。授業に関する悩み相談や、お互いに教授法を学び合う場である。「言語聴覚士のための音響学」には研究会が存在しない。

2.2 「言語聴覚士の音響学」の問題

臨床上の知識を得るためには、言語聴覚士とのつながりも必要であるが、両者が参加す

る学会や研究会がない。さらに、現役S T にとっての音響学には以下のような問題がある。

- 1) 養成校の音響学の授業に起因した苦手意識[2]、臨床現場の環境もあり、現在、現役STで臨床上、音響学を活用した業務を行う者はほとんどいない。
- 2) 音響学教師、言語聴覚士の両者が、今まで、臨床上、どのように応用できるかを考えてこなかった。お互いに話し合う場もなかった。
- 3) 聴覚検査や補聴器、人工内耳など聴覚障害の分野に直接関わった経験のないS Tが多く、「音響学・聴覚心理学とこれらの分野との関わりはない」と答えるSTも多い。

3 つながるための活動

3.1 Facebook のグループ

身近な話題を気軽に相談できるように、S T 養成校の音響学・聴覚心理学教師と教科書の著者を対象に Facebook で、「言語聴覚士養成校の音響学」という非公開グループを作成した。現在、参加者は11名である。

3.2 「S T のための音響学」

S T 養成校の音響学（聴覚心理学を含む）の授業内容の難易度や理解度調査、臨床での活用方法を調査するため、2021年3月より「S T のための音響学」という講習会を Zoom でオンライン開催している。[3]この講習会は、今まで、現役S T を主な対象としてきたが、第12回講習会より、「音響学・聴覚心理学」教師も対象とし、積極的に参加者を勧誘し、本講習会を授業研究の場とすることにした。今後は、現役S T と「音響学・聴覚心理学」教師の交流も考えている。第12回「S T のための音響学」に参加した言語聴覚士と音響学教師に行った調査結果を以下に示す。

3.3 S T が学生にできること

（複数選択可能、単位：名、回答者25名）
先輩として卒業後も勉強する(17)

* Making "connections among acoustic teachers of the speech therapist courses.", by TAKEUCHI, Kyoko (Juntendo University), AOKI, Naofumi (Hokkaido University), ARAI, Takayuki (Sophia University), SUZUKI, Keiko・HATA Wakana (Kitasato University), SEKI, Hideaki (Chiba Institut of Technology) and YASU, Keiichi (Tsukuba University of Technology).

今の職場で何ができるか考える(17)
音響学・聴覚心理学の先生に臨床現場の事情を教える(4)
学生時代、困っていたことを本音で語る(7)
今の職場でできることを始めてみる(15)
研究発表などで発信する(8)
学生が音響学・聴覚心理学の授業のどこが分からないかを代弁する(6)
授業につながりそうな臨床応用例を発見する(6)
参加した講習会の伝達講習を職場で行う(7)
音響学・聴覚心理学の教材を作成してみる(5)
養成校のカリキュラムを変えてみる(1)

3.4 STが音響学教師に望むこと

(複数選択可能, 単位: 名, 回答者 25 名)
STのための音響学・聴覚心理学であることを理解して欲しい (14)
学生の理解度を把握して欲しい (15)
教授法の研究・改善をして欲しい (4)
教科書・教材の研究・改善をして欲しい (8)
養成校のカリキュラムを理解して欲しい (4)
言語聴覚療法にもっと関心を持って欲しい (3)
STの研修会や学会に参加して欲しい (8)
共同研究をして欲しい (6)
分からないことは質問・相談して欲しい(2)
お互いに本音で語り合う場を作りたい(3)
学生の気持ちを伝えたい(3)
音響学・聴覚心理学の勉強会を一緒に開催して欲しい(4)
ST教員も含めた音響学・聴覚心理学の授業を試みたい(4)
他の科目と連携を深めて欲しい(6)

3.5 音響学教師が学生にできること

(複数選択可能, 単位: 名, 回答者 1 名)
言語聴覚療法について勉強する(1)
カリキュラムについてよく知る(1)
学生の理解度を知る(1)
学生の気持ちを理解する(1)
教材を研究・改善する(1)

3.6 音響学教師がST教員に望むこと

複数選択可能, 単位: 名, 回答者 1 名)
STの音響学・聴覚心理学の特徴を教えて欲しい(1)

4 まとめ

本発表では, ST養成校の音響学・聴覚心理

学教師間のつながり, さらに言語聴覚士とのつながりを作る活動の現状を報告した。言語聴覚士側は, 音響学教師に対して具体的な要望を持ち, 今後の共同作業を歓迎していることが分かった。しかしながら, 音響学教師の事前アンケート(4名)では, 「物理を勉強したことのない学生にどのように教えたらいいか」という悩みを持つものが多かったが, 「他校の先生の実践内容に興味があるか」の質問には, はい2名, いいえ2名だった。まだ参加している音響学教師が少ないうえ, 積極的につながろうと考える者も少なかった。

5 今後の課題4

今後は, Facebook等と, 「STのための音響学」の講習会を継続するとともに, 全国の言語聴覚士養成校の音響学・聴覚心理学の教員に対するアンケート調査をし, より多くの音響学教師の意見をうかがい, 現状を調査していきたい。

謝辞

本発表は, 言語聴覚士養成課程における「音響学教育」の現状調査と授業ガイドライン, 教材作成(科研費番号 20K03074)と声道模型を中心とした音響学・音声科学の教育とICTの融合(科研費番号 21K02889)の成果である。また, 「第8回 STのための音響学」は, 日本音響学会 音響教育委員会, 日本音声学会, 東京都言語聴覚士会が後援していただいたことに感謝する。

参考文献

- [1] 竹内京子, 越智景子, 音声学・音響学への関心度, 苦手度実態調査言語聴覚士養成校学生のアンケートから, 日本音響学会研究発表会講演論文集 CD-ROM, 2015
- [2] 竹内京子, 青木直史, 荒井隆行, 鈴木恵子, 世木秀明, 秦若菜, 安啓一, ST 養成校の音響学の思い出調査
研究発表会講演論文集 CD-ROM, 2021
- [3] 本科研費のHP
<https://sites.google.com/view/stonkyo>